心の在る場所

祇諳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心の在る場所

【Ｎコード】
Ｎ３７９３Ｉ

【作者名】
祇諳

【あらすじ】
たった一人、彼女を守るぬいぐるみ。
そいつは、僕に何を伝えたいんだろう。

夕立で濡れる帰り道の、熱せられたコンクリート。赤く染まる空。
僕の大好きな空間。
雨に濡れたまま家路を急いでいた僕は、不意に視界に入った少女に足を止めた。

「高杉さん・・・？」

クラスメイトの高杉夕騎。
いつも教室の隅で本を読んでいて、挨拶以外に一日中誰とも話さない、おとなしい人だ。
彼女は傘もささずにいた。彼女の家はここから遠いはずだ。

「高杉。風邪引くよ？親だって心配するだろうし・・・」

声をかけた僕に目もくれず、何かをぼんやり見ている彼女。
その視界の先には雨に柔らかく濡れるねむの花が咲いていた。
視界をさえぎるように、彼女に前に立った。
沈黙が雨音に埋められる中、彼女の目はとても寂しげで、悲しげで、冷たかった。

「・・・大丈夫」

雨音の合間から彼女の細い声が聞こえた。

「誰も、心配なんてしないから」

夕焼け色の水溜りに広がる波紋。
視界にあったねむの花が雨の雫を弾いた時、彼女は僕に背を向けて走っていってしまった。
引きとめようとして踏み出した足がすくむ。

今、いけないものを見た気がした。

――――手首を流れ落ちる、雨の混じった、赤。――――

どこかで怪我をしたのかもしれない。
でも僕はそう思えずにいた。

彼女の胸ポケットに、錆色のカッターナイフを見つけてしまったから。

何処か影のある、表情のない少女。
最初のイメージは、そんな簡素なものだった。
彼女は僕の目にはとても不思議に映った。
僕の周りにいる少女は、いつも噂話に花を咲かせているような今時の女子高生だったからだ。

そんな、僕の記憶の片隅にしか残らなかったであろう彼女が、とある出来事をきっかけに僕の心に居座った。

それは、新学期が始まって三ヶ月が経とうとしていたある日。
僕は学校帰りの坂道で空を見上げていた。
青い青い、空。
木々の若葉が芽吹いているのを、目にも鼻にも感じる。
まだ、ほんの少ししか目を出していない大きなネムの木の枝が、空に手を伸べるように真っ直ぐ伸びていた。
その先端に、何かが風に吹かれて揺れている。
僕は目を凝らしてその影を見た。

それは、小さな犬のぬいぐるみ。

小石を投げ付けてぬいぐるみを落とすと、坂の上から小さな声が聞こえる。

「あの…、それ、私のです」

長い髪が風になびく、強い目をした少女がいる。
高杉だった。
彼女を見上げてぼんやりと立っていた僕は、
ぬいぐるみを拾い上げ彼女の前まで走って行った。
突然、それまで刺すように僕を見ていた彼女の目が、
怯えとも動揺とも言えない複雑な色に変わっていくのが見えた。

「はい、これ」

布地も薄くなり、綿も偏っているその辺鄙なぬいぐるみを彼女に手渡すと、
無表情でこわばっていた顔が緩み、それを大事そうに握り締めて微笑んだ。

「大事なものなんだな、それ」

「うん」

僕を見て、笑って言う。

「この子は、私と一緒に歩いてきたから」

重い、耳に残る言葉。

「ありがとう。」

最後に僕の目を見て微笑んだ彼女に、
ぬいぐるみが木に引っかかっていた理由なんて聞けなかった。
聞く必要のないほど、当方の予想は付いていたから。
誰とも打ち解けられずにいた彼女は、暇なクラスメイトのからかいの的になっていた。
度の過ぎた悪戯をするものもいて、おそらくそいつらの仕業だろう。

その日、僕は彼女が、絶えず人の声に怯えているということを知った。
あの、坂を登っている時に見た、恐れにも似た疑念の目を見て。

その夜不思議な夢を見た。
何も見えない暗い一本道に高杉がいた。
困り果てている彼女の手を引くのは、あのぬいぐるみの犬。
泣きそうな顔をしていた彼女に、懸命に何か言っている。

くらいみちはいまだけ。ひかりにあるく。
はねがないからあるきましょ。
かなしいのはいまだけ。ゆめをみましょ。
ゆめにはきっと、てがとどく。

繰り返し、繰り返し、言い聞かせるようにその言葉を言い続けているぬいぐるみ。
きっと高杉のことが大切なんだな、と寝ぼけながらぼんやりと思った。

目覚めると、夜は白々と明けている。
空には雲ひとつなく、白い月が見えていた。

学校に向かい、教室に入ると一番最初に高杉と目が合った。軽く会釈をすると、無表情にこちらを見ていた。

「高杉って、変だよな」

席に付く僕に友人がそう言うのを黙って聞きながら、さりげなく彼女の方を見ると、
独りで本を読んでいる傍らには、あのぬいぐるみが彼女を守っているかのごとく鎮座している。

「誰とも話しないんだぜ？暗いったらありゃしない」

「ヒトそれぞれだろ」

友人の話をさえぎった僕は、黙って授業の予習を始めた。

昨日まで聞いていた悪口や噂話に無性に腹が立って仕方ない。
高杉の机の上から、ぬいぐるみが冷ややかに僕を見ている気がした。

放課後、何気なく教室を出て屋上に向かうと、夏の匂いのする風が気持ちいいほどに僕の頬を撫でた。
空は抜けるような青。コンクリートの照り返しが眩しくて、僕は目を伏せた。

「…あれ？」

誰かの歌う声が聞こえる。懐かしい感じのする歌。
薄く目を開けるとそこに、声をかけるなとでも言いたげにこちらを見ているぬいぐるみがいて、僕は足を止めた。

ふと見ると、その横で高杉が裸足で歩きながら空を仰いでいた。

不意に高杉は僕に気付き、歌うのを止めてしまった。いつもの険しい顔に戻る。

「それ、何の唄？」

「…兎の唄。」

そう言うと、高杉は悲しい目をして空を見上げた。

その口からこぼれた唄は、彼女の伝えたい言葉。

その言葉の意味はなんなのだろう。
鮮やかに、目を閉じても消えない空の青。
光は確実に彼女を照らすのに、光を捉えない彼女の眼。
かろうじて聞き取れるほどの囁くような言葉が彼女の口から漏れた。

「鳥に、なりたいな」

そう言って両腕を空に伸ばして目を閉じた。
太陽の強い日差しで、服が透けて見えた左腕に僕は絶句した。

傷跡。無数の、人為的な、赤黒い傷跡。

「なんだよ、その、腕」

僕の言葉に返事を返さず、彼女は空を見据えていた。

「誰かがやったのか？　おい、返事くらいしろ。」

肩をつかんだ僕の手を振りほどき、彼女はその場にしゃがみこんだ。

「誰かにやられたのか？」

僕の問いに、彼女は首を横に振り、僕を見上げてつぶやいた。

「自分でやるの」

「え、」

「鳥になるための、おまじない」

かすかに、彼女は笑った。その意味を理解できるほど、僕は利口ではなかった。優しくもなかった。

彼女が時折見せる影の実態を知ったのは、それから一ヶ月も経ってないある日の休み時間だった。

湿気った気だるい風の中で、相変わらず女子の噂話が聞こえる。その中に高杉の名前があった。

「あのヒト、親にぶたれた傷が身体中にあるんだって。虐待児だよ、ギャクタイジ」

一瞬、心臓に針を刺したような痛みが走った。

「だから、あんな変なぬいぐるみいっつも持ち歩いてるんじゃね？頭おかしくなって」

「あんな調子だから、前も苛められてたらしいよ」

「わかる、わかる。キモイもん、アイツ」

甲高く笑うその声が耳に刺さる。

なぜこんなことを笑えるのだろう。

悲しいことだとか思わないんだろうか。

机に突っ伏したまま、僕は高杉を見た。

ぬいぐるみは心配そうに彼女を見ている。

彼女は何も聞こえてないかのように黙って本を読んでいた。

風が柔らかく吹く真夏の夜。

何気なく散歩に出た僕は公園の芝生に座り、空一面の星を見ていた。

木陰の暗がりの中に人影がある。

「・・・高杉？　何してるんだ」

切り株に座って何かを見上げてる彼女に声をかけると、はっとしたように振り向き、ひどく怯えながらこちらを見た。

家から追い出されたのだろうか。

夏と言えども、夜は白い薄手のワンピース一枚で歩くには少し肌寒い。
おまけに彼女は裸足だった。

「時田…君…」

僕の姿を認め、ほっとしたような顔をした彼女の手にはいつものぬいぐるみがある。

犬らしくないそのぬいぐるみは、いつの間にか僕の中では特別なものになっていた。
僕の目には、まるで生きているかのように表情がコロコロ変わって見えるのだ。
ぼさぼさの毛、むくれた顔、ずんぐりとした身体についた短い手足が犬らしさを激減させている。
しかし首輪をしているのでかろうじて犬に見えるという代物だった。

僕の心の内を察してか、ぬいぐるみは僕をにらみつけた。
そんなやり取りにも気付かず高杉は黙って、夜空を見上げる。
その視線の先には月があった。青白い月が彼女の横顔を照らすと、彼女の肌は陶器の色になり、まるで人形のようだった。
ネムの花のつぼみに伸べられる、彼女の痩せ細った腕に刻まれた深い傷跡が、とても見ていられないほどに切なく、あまりに痛々しく、僕は目を伏せた。

鈍色のコンクリートに青磁の空。

まるで息のできる海みたいだった。
月明かりの波の間を漂うようにうつろう彼女。
何もできない僕。

自分の無力さに腹が立ったのは初めてだった。

助けたいと思うようになっていた。
しかし、何をしたらいいか解らずにいる僕は、ただ高杉を目で追っているだけで、あのぬいぐるみのほうがよっぽど彼女のことを守っているように見えた。

自分がとても無力に思えて、僕は彼女に背を向けて逃げ出してしまった。

そして最近は彼女を目で追うこともしなくなっていた。
走り去っていった彼女に何があったのかわからずに、僕はただ、初めて見た生々しい赤を拭い去ろうと家へと駆け出していた。

翌日、彼女は学校に来なかった。
何の違和感もなく進む時間の中で、高杉の机だけが取り残されたように見える。
その机を何気なく除いた僕は一編の詩を見つけて凍りついた。

人は虐げられると猫になります
他人に近づけなくなり
人が近付いてくると爪を立てます
人は虐げられ続けると犬になります
他人が近付くと逃げ回り
他人の言葉に怯えます
人は追い詰められると兎になります
黙ったまま何も話さず
うつむいてしまいます
人は最後に鳥になります
誰にも気付かれずに独りで、残酷な空へ。

それでも兎は空を切望する
地上についてるこの足を呪うように
それでも人は繰り返す

悲しみの果てのない
残酷な痛みの歌を
兎の歌う悲しみの歌を。

『鳥になりたい。』

彼女の言っていた意味が、今解った。

放課後の部活をサボり、ぼんやりしていたある日、教室に数人の女子が残っていた。
その会話の断片が耳に入る。

「高杉、来ないね」

「よっぽどショックだったんじゃない？　ぬ・い・ぐ・る・み」

ぬいぐるみ？　自分の神経が耳に集中した。高杉のぬいぐるみがどうしたんだ。
そのとき僕は、彼女が一心不乱に何かを探していたことを思い出した。

「あれ、どこに隠してきた？」

「えー、あんな汚いの、何処にって、一つでしょ？」
クスクスと笑いながら、女子生徒は言う。

「焼却炉横のゴミ箱」

走った。
自分でも信じられないくらい速く走った。
階段を駆け下り、玄関を飛び出し、焼却炉のある裏庭まで全速力で。
ただ、あのぬいぐるみを守るというだけのために僕は走っていた。

焼却炉の側に、用務員さんの影があった。
その手の中にはたくさんの紙くずと共にぬいぐるみがある。
一秒が、まるでスピード写真の一コマ一コマのように、長くゆっくり過ぎていく。
紙くずが火の中に投げ込まれると同時に、ぬいぐるみが焼却炉の中に吸い込まれていく。

気がつくと、僕は火の中に手を突っ込んでいた。

湿気った風と鉛色の空。
もうすぐ雨が降りそうな、重い色の空。
おぼつかない足取りで公園のベンチにたどり着いた僕は、夕暮れ時の上気した地面を裸足で歩く少女を見つけて、ゆっくりと近付いた。

大切な、なにかが欠けていて、それを補うためのものがあってこそ成り立っていた心。
その心の糧がなければ命のバランスが保てない、鳥になりたいという彼女。
悲しげな顔をした彼女はいつも空を見上げていた。
まるで何かに憧れるように。

「…兎」

ポツリと彼女がつぶやく。

「わたしは、兎なの。…鳥になりきれない、兎。」

「どうして…？」

僕はその言葉に問いかけてみた。

彼女は僕の声に顔を上げる。

「許してくれないの、誰も。…兎が、足を、地から離すことを」

隠していた左腕が見えた。
目を覆うほどに腫れあがる傷跡が、鳥への憧れの形。
そして彼女が受けた痛みの形。

「空は、淋しいところだぞ」

届きそうに近い雲に手を伸ばす彼女と一緒に、空を見上げた。
その空はいつも僕が見ている空とは違う。
光のカーテンが雲間から差し込む、恐ろしいくらい神々しい空。

「淋しくないよ。きっと、だれかしら、あそこにいてくれるから。」

「だれもいない」

「じゃぁ、居なくていい」

「独りに、なるぞ」

僕がそう言ったと同時に、高杉は僕を鋭く睨みつけ、怒鳴った。

「ここにもだれもいないじゃない！ここにいてもわたしはひとりぼっちじゃない！」

雨が、柔らかく降り始め、彼女の髪を濡らす。
ネムの花が雨のしずくを弾き、パラリと地面に落ちた。

「だれも助けてくれないじゃない…。だれも、そばに居てくれないじゃない…」

突然、彼女は大声を上げて泣き出した。まるでその様は、迷子になった子供みたいだった。

僕の手の中の彼女の親友は悲しそうに彼女を見ていた。
暖かなまなざしはどんな生き物よりも真っ直ぐに、純粋に、彼女を見ていた。

「高杉が独りだなんて、思わないぞ」

僕はゆっくりと親友を彼女の目の前に差し出した。
尻尾がこげて、余計にみすぼらしくなったぬいぐるみが彼女を見る。
彼女の掌にぬいぐるみを置くと、嬉しそうな笑顔と共にそれをぎゅっと握り締めた。

「…、これ…」

気付けば雨はあがっていた。雲間からさす月明かりがネムの花を照らして輝いている。

彼女は再び空を見上げた。
蒼い月の照らすネムの花が、まるで取りの羽のようにゆっくりと水溜りに落ちる。
波紋が広がるように、静寂が辺りを包んだ。

「…人は、動物にはならない。」

僕の声にゆっくりとこちらを見る。

「…君は兎じゃない。鳥にもなれない。
悲しくても、苦しくても、空にはいけない。
羽が無い僕らは、飛べないもの。」

彼女の手の中のぬいぐるみは僕を見ていた。
僕が言おうとしていることを察しているかのように。

このぬいぐるみには出来ないことがひとつだけあった。
それは、彼女を励ましてあげること。

つらいとき、言葉をかけてあげられない。
それが、僕には出来る。
ぬいぐるみは僕に伝えて欲しかったのかもしれない。
大切な、温かい言葉を。

くらいみちはいまだけ。ひかりにあるく。
はねがないからあるきましょ。
かなしいのはいまだけ。ゆめをみましょ。
ゆめにはきっと、てがとどく。

夢の中でぬいぐるみが言ってた言葉は、高杉を助けるためのメッセージなのかと、
不意に思った僕が居た。

「僕らは人間としてしか、生きられないんだ。」

言葉が、重く、空気に波紋を作る。

「でも、今、悲しいとしても、大丈夫。僕らは乗り越えられる。」

うつむいたまま、彼女は呟いた。

「…ても、いいの？」

「え…？」

顔を上げた彼女の目は、不安そうな色で僕を見ている。

「私は、ここで、生きていても、いいの…？」

彼女の不安。

今まで誰にも聞けなかった問いを口にした彼女に、幼い子供の面影を見る。

親に否定されることを恐れる、子供の姿。

ココロだけが置いていかれて、身体だけが成長していった、幼い子供。

待っていたのだ。たった一言、この言葉だけを。

「いいんだよ…。ここに居て。

…いいんだ。生きて…。

生きよう。」

夜風が吹いて、
彼女の横顔を月明かりが照らすと、彼女は微笑みながら僕を見た。
初めて会ったときの笑顔とは違う、恐れの無い笑顔。

「…、ありがとう」

決意に似た光が、彼女の眼差しに宿っていた気がした。
ぬいぐるみは最後に少しだけ笑って、その役目を終えた。
いつもと変わらない朝。寝ぼけまなこで学校に向かい、教室に入る。ふと目が合った高杉に声をかける。
「おはよう」
「…おはよう…」
か細い声と、僕に向けた笑顔に、教室中がどよめく。高杉はおもむろに立ち上がり、僕のほうへと歩いてくると、窓の外を見上げた。
「…空に誰も居ないなんて、ウソ。空には、月がいるよ」
青空に浮かぶ残月を見て、僕にそういうと、高杉は小さく笑った。
「…でも、行かないんだ」
「何で？」
微笑んで僕が問うと、そのまっすぐな目を僕に向けた。
「私は、鳥にはなれなかった。」
そういった後、彼女は不器用にクスリと笑った。
「生きたいって、生きていたいって、思ったから」
彼女の席の上で、鞄につけられた古ぼけたぬいぐるみが意思もなく

ゆれていた。
<了>

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3793i/

心の在る場所

2011年1月19日11時36分発行